

こころの



言の葉

—第20集—
大切なあなたへの思い
いつまでも

令和4年度
鹿児島市「こころの言の葉」コンクール 作品集

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 原之園 哲哉

本年度の「こころの言の葉」コンクール作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成15年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今年度は記念すべき20周年を迎えました。

本事業には、面と向かっては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを1枚のはがきに託し、中学生とその保護者の心の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は14,956点。その内、保護者の部には2000点近くの応募があり、「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である保護者と子供の心の交流が図られていることをうかがうことができました。さらに、8月にはエフエム鹿児島の生放送番組「あさCAFE」で前年度の入賞作品が朗読されることが恒例となり、より多くの市民の皆様が親しまれる機会を得たことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生とその保護者が、お互いに向けて宛てた40編のメッセージが掲載されています。また、今回は20周年記念として、過去の作品も一部再掲しています。今年度の作品と合わせてこれまでの作品もご覧になってください。中学生の家族に対する感謝の思いや思春期の揺れ動く思い、そんな中学生を温かく見守る保護者の思いが言葉の形になった「こころの言の葉」は、いつの時代も読む者の心を大きく揺さぶることに改めて気付かされます。

20年という時間は、人間で言えば十分に成長し、社会的にも認知されるようになる年月です。これからも本事業の取り組みがますます広く認知され、市民の皆様が保護者や子供、家族の在り方について考える契機となることを願っております。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様から感謝申し上げます。

令和5年1月

目次

思いを伝える言の葉―子から家族へ―

気づいているよ……………	4
父のほめ言葉……………	5
私の絵……………	6
かぎっ子……………	7
かわいそうな子なんかじゃない……………	8
朝の五分……………	9
甘えたい長子……………	10
天国にいるお母さんへ……………	11

思いをつなげる言の葉―保護者から子へ―

娘の成長と私の成長……………	13
小さな成長……………	14
あなたのおかげで……………	15
孝行息子……………	16
ありがとう……………	17
柱……………	18
今あなたに伝えたい事……………	19
感謝が溢れる坂道……………	20

思いを交える言の葉―子から家族へ―

家族の音……………	22
お願い、私に頼んでくれませんか……………	22
寝ているふり……………	23
私の母ちゃん……………	23
十回のごめんと一回のありがとう……………	24
もっちゃんうらない……………	24
お父さんの耳……………	25
大好きなばあちゃんへ……………	25
似ているところ……………	26
母と私を結ぶご飯……………	26
涙の理由……………	27
母のスマートフォン……………	27

思いを重ねる言の葉―保護者から子へ―

見ていてくれてありがとう……………	29
未来に向かって……………	29
中学生になったあなた……………	30
二人っきりの十五分間……………	30
幸せの倍数……………	31
幸せな時間……………	31
命の授業……………	32
またあとでのおまじない……………	32
二十六円の幸せ……………	33
「くま」の顔……………	33
人生は試練の連続……………	34
心のサイン……………	34

令和4年度「こころの言の葉」

コンクール入賞者一覧……………	35
令和4年度「こころの言の葉」 コンクール表彰式……………	36
審査員講評……………	37

第二十集記念 回想の言の葉

―子から親へ―	
父の卵焼き……………	40
母の思い……………	41
ありがとう、父さん……………	41
言葉をもろう日……………	42
心の花……………	42

第二十集記念 回想の言の葉

―親から子へ―	
大人の宿題……………	43
頑固親父の本音……………	44
中学生の君……………	44
あなたに甘えていました……………	45
息子よ……………	45

編集後記……………	46
-----------	----

思いを伝える言の葉

— 子から家族へ —



気づいていてるよ

気づいていないフリしているけれど、いつも私のことを思ってくれて
いるのに気づいていてるよ。

朝早くから起きて弁当をつくり、家を出るのを見届けて、急いで仕事
に行っている姿が目に見えかぶから。

笑って明るくふるまって、いつも疲れをこまかしているけれどそれも
気づいていてるよ。

いつも無理して夜中まで起きているのをこっそりと見ていたから。

怒っているのも悩^{なや}んでいるのも全部気づいていてるよ。

だって、私はお母さんの娘^{むすめ}だから。

ずっと育ててくれたから。

何て声をかければいいのかわからないから、気づいていないフリをして
いるけれど、

気づいていてるよ。



父のほめ言葉

私の父は冷たい。

ほめてくれることはあったけど、心の底からの言葉には聞こえなくてー

私は無意識に、どんなに良い結果を出せても父には振り向いてもらえないと思っていた。

その考えが間違いだど気付いたのは六年生するとき、習い事の大会で初めて一位を取れたとき。

金メダルを持った私を見て父は涙目なみだになっていた。

父は帰りにいつも通りのほめ方でほめてくれた。

だけど、私の心に残ったのは父の涙目だった。

父は私をすごいと思ってくれたんだ。

それから私は、父がほめると素直に喜ぶことが出来た。

父は、ほめるのが下手なのかもしれない。

けど、今となっては父の言葉が最高うれに嬉しい。

これからもたくさんほめてね。



私の絵

私は小さい頃から絵を描くことが好きだった。

よく紙に絵と少しのメッセージを書いて母に渡していた。

母は私から絵をもらったとき、とても嬉しそうに笑っていた。

中学生になると勉強や部活の両立で忙しくなり、あれほど好きだった絵を

描くという作業もしなくなっていた。

最近のことだ。

私は家にある母のダンスを興味本位で開け、中をのぞいた。

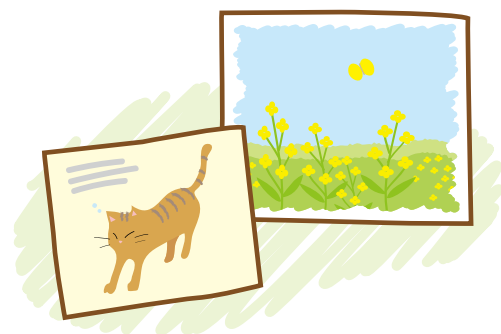
するとそこにはまだ幼く、絵を描いていた頃の私が母にあげたすべての絵が

大事そうにしまわれていた。

私は絵は全部捨ててしまったのだろうと思っていた。

ダンスを開けたことは母には内緒だが、母にむけて絵を描こうと思う。

私の感謝の言葉も入れて。



かぎっ子

幼稚園生の頃からかぎっ子だった私は、毎日さみしい思いをしていました。ただいまと言っても誰からもおかえりと返ってこない生活だったので

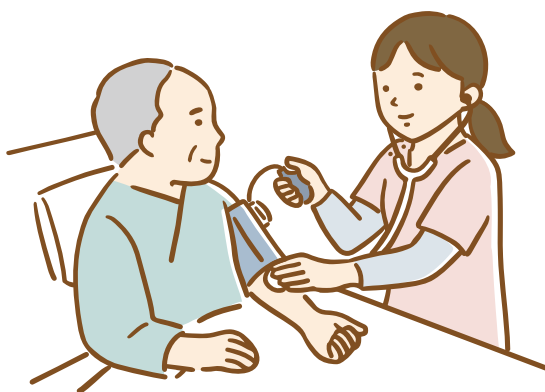
きつと父と母は私のことがきらいなんだと思いこんでいました。

しかし、ある日母の帰りがどうしても遅くなってしまうということで、母が働く病院に行くことになりました。

私とその病院で見た母は、とつてもかつこよくて患者さんに優しく寄り添うヒーローみたいでした。

母は今まで、患者さんのため、家族のため、そして私のために働いてくれているということに初めて気づきました。

だから私はあの日以来、母が帰ってきた時におかえりと笑顔で言えるようにしようと心に決めました。



かわいそうな子なんかじゃない

私は一人っ子で父親がいない。

みんなに「大変だね。」とかかわいそうなんて言われるけど、私は自分がかわいそうなんて思った事は一度もない。

なぜって私は毎日じゅうじつが充実じゅうじつしていて楽しいからだ。

そしてこの世の中で母を一番に愛している。

私のために朝七時に家を出て夜九時に帰ってくる。

そして家事もこなし、どこにでも連れて行ってくれる。

こんな最高のお母さんは私の母だけだと改めて思う。

そして母に伝えたい。

「産んでくれて、私を大切にしてくれてありがとう。」って。

私は次生まれ変わっても、お父さん、兄弟がいなくてもいいから、お母さんの子になりたいと強く思う。

そして最後に私はかわいそうな子なんかじゃない。

私はこんないい家族をもって世界一幸せな子だ。



朝の五分

朝六時半くらいかな。父の少し低い声が私の部屋に響く。

「六時四十五分、学校おくれるよ。」

あわてて飛び上がり時計を見ると、まだ四十分にもなっていないかった。

父はいつも五分くらい時計を先読みして言うてる。

そうしないと私が起きないのだ。

いつものことなのに毎回引つかかってしまう自分に嫌気が差す。

いつもの日常だ。

それから一か月くらい。

今日はいつになっても父の声がしない。

不思議になって起き上がると、あることに気づく。

「あ、昨日から単身赴任か。」

まだ一日も経っていないのに少しさみしい。

いつもありがとう。

お仕事、がんばってね。



甘えたい長子^{あま}

私は長子だ。

私も甘えたいのに、末っ子ばかり甘えてて、いつも腹が立つ。

もう中学二年生だから、そろそろ反抗期^{はんこうき}が来るのかな。

そしたら、余計、素直に甘えられなくなるじゃん。

それは困る。

今のうちに甘えておこうかな。

感謝の気持ちも込めて、甘えよう。

少し恥^はずかしいけど、本音を言うと長子も甘えたい。

末っ子は簡単にいつも甘えているから正直うらやましい。

素直に甘えることができるようになるまで待つてね。

反抗期が来るまでに甘えられるようになってみせるから。



天国にいるお母さんへ

今、元気にしていますか。

私はとても元気にしています。

すっかり空の上から見守ってくれていますか。

今でも悲しいときやうれしいことがあったら空を見上げています。

お母さんが空へ旅立ってから約十年が経とうとしています。

私も今年で十五歳になります。

幼いころの思い出は、今でもしっかりと心に残っています。

ずっと笑顔を絶やさず明るくしていたお母さんは、私にとって最高であり自慢です。

どんな時でも私の心の中にはお母さんがいます。

これからもよろしくね。

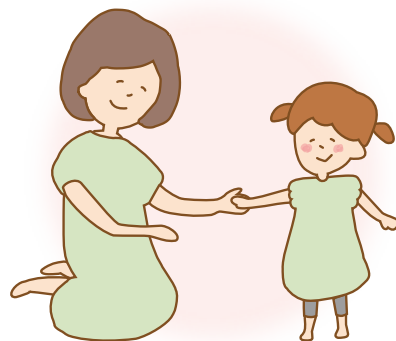
小さい頃から大好きだったお母さん。

今も変わらず大好きです。

すごく「会いたい」と思うこともあるけど近くにお母さんがいると信じて頑張って生きていこうと思います。

最後に、今までありがとう。

そして、これからもよろしくね。



思いをつなげる 言葉の葉

— 保護者から子へ —



娘むすめの成長と私の成長

娘が年少こころの頃、初めて幼稚園ようちえんのPTA役員を引き受けた。

泣き虫な娘に会いたい気持ちでいっぱいだったが、会えば泣いて私から離はなれなくなり、先生方に迷惑めいわくをかけてしまうので、役員の集まりの度、先生方とアイコンタクトで役員室までダッシュしていた。

慣れない資料作りや役員間の連絡、大人とは言え、人間関係が難しい時もある。

そんなある日、ばったり娘に園庭で会ってしまった。

焦あせる私をよそに娘は、

「ママ、わたし知ってるよ。ママはみんなのためにいっぱいお仕事をしてくれているんですよ。わたしはうれしいよ。ありがとう、だからもう泣かない。」
たった一言。

中一になった娘は忘れているかもしれないけど、今でも役員ができる原動力だ。



小さな成長

私は、仕事で船に乗っている。

一年の三分の二近くは海の上にいる。

休みの時は息子と仲良く話す。

そんな時、息子の成長を感じる時がある。

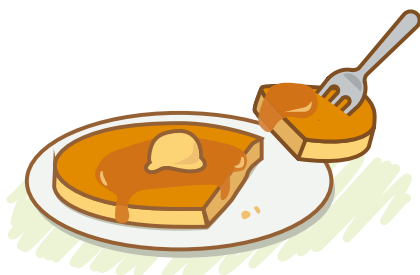
息子が一人でおやつを食べている時や外食で私と違うものを食べている時に

自分から「少し食べてみる？」と聞いてきてくれる。

些細なことだが、小さな優しさにほっこりする。

普通一緒にいないからこそ、小さな言動に成長を感じるのかもしれない。

会えない日々は寂しいが、会う度に気付く小さな成長をこれからも続けてほしい。



あなたのおかげで

私たち親子は、よく笑う。

いつも母と娘、二人で笑っている。

「お母さんよく笑うし優しそうで羨ましいって言われた」
そう聞いたとき、

「言われて嬉しかった？」と聞き返す。

娘は「当たり前じゃん」と。

「…そうだよね、ハーハツハー（笑）」と、私が笑う。

つられて娘も笑い出す。

何故いちいち笑うのか自分でも不思議だった。

だけど、答えはすぐに出た。

私の病気の関係で、娘が幼い時にほとんど一緒に居られなかった。

色々と、本当に色々と、辛い思いをさせていた。

でも今、やっとこうして一緒に居られて

当たり前前に親子の時間を過ごさせている事が、嬉しくて仕方がないんです。

「なんでもケラケラ笑って…赤ちゃんですか」と呆れ顔のあなたに、

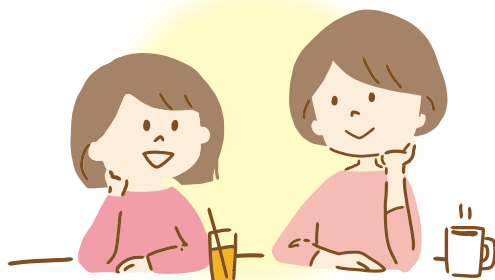
心の中で（こんな表情もするようになったんだ…）と感動しながら

「あなたといると何でも楽しいから笑うんだよ」と返すと

「えっ、…どうい事」と変な空気に。

そして、また二人で笑う。

今日も近くで成長を、可愛い笑顔を見せてくれてありがとう。



孝行息子

小学校の時から、しょっちゅう近くに住んでいる祖父母に会いに行っていた息子。

毎回嬉し^{うれ}そうに笑顔で迎^{むか}える祖父母。

「大きくなったね。」

と毎回言われ、ニコニコ顔になっていた息子。

中学生になってからは、回数は減ったものの、晴れた土曜日に自転車で会いに行く息子。

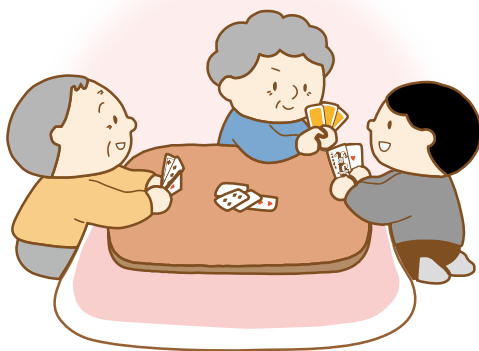
いつものように笑顔で、自分よりずっと大きくなった思春期の息子をハグする祖母。

ニコニコ顔でハグされている息子。

それを見る母はいつも嬉しく思う。

忙^{いそが}しくなっても祖父母のことを思ってくれてありがとう。

何よりの祖父母孝行・親孝行だと思う。



ありがとう

弟に障害があり

たくさん我慢^{がまん}させてきたけれど

いつも笑顔で「いいよ」と。

本当は「嫌^{いや}だ」も言いたいよね。

優しい娘^{むすめ}に育^むってくれて

本当に嬉^{うれ}しいです。

ありがとう。



柱

「僕^{ぼく}が一家の大黒柱です。」

家庭訪問で先生に、そう瞳^{ひとみ}を輝^{かがや}かせ言^いってくれた日から今日までの数年間、

母を、弟たちを、息子として、兄として、時には、父親代わりをして支えてきてくれたね。

本当にありがとう。

あなたにとっても、大切な大切な中学校生活。

たくさん、ガマンした事もあったよね。

もう、残りわずかになったけれど、

これからは、母がしっかりと支えていくから

あなたの輝く未来を一緒に見つめよう。



今あなたに伝えたい事

「ありがとう」「ありがとう」

小さい頃こころからよくありがとうと言っていましたね。

小さい頃は、その言葉を聞かされた時にはほえましく、嬉うれしく思っていました。

小学生になり、高学年になっても、相変わらずどんな小さなささいな事にも

「ありがとう」と言っていましたね。

素直に「ありがとう」と言えるのは、とても素敵な事だと思います。

そして中学生になり、男の子の反抗期はんこうきが来るのが楽しみなような怖こわいような

気持ちでいましたが、小さい頃と変わらず、「ありがとう」という言葉。

あなたのおかげで「ありがとう」という言葉がどれほど大切か、人の心を

あなたかくするか、どんな言葉より周りを幸せな気持ちにするか知る事が

できました。

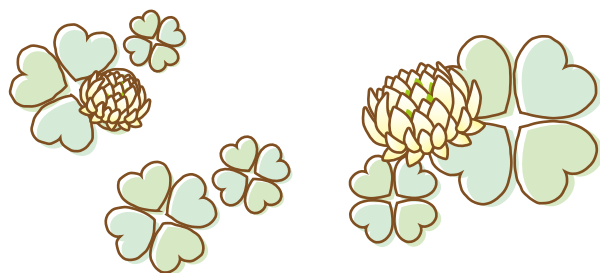
「ありがとう」の大切さを教えてくれて本当にありがとう。

これからも高校生になっても、社会人になっても、結婚しても今まで通りの

「ありがとう」を言える人でいてください。

そうすれば人生はほとんどうまくいきます。

そうすれば自分も周りの人も必ず幸せになります。



感謝が溢れる坂道

長女の入学で三十数年ぶりに母校の門をくぐった。

桜島が一望できる校庭や校内の坂道がとても懐かしかった。

同時に中学生の頃の自分の感情が蘇ってきた。

心の中に悲しみを閉じ込めて過ごした日々のこと。

二歳年上の兄は入学して間もなく、

学校までの長い坂道を自分で登る事が出来なくなってしまった。

すでに癌に侵されると判り、約一年間の闘病の末、亡くなった。

最後まで希望を持ち生きたいと願い続けた兄の無念さを思うと今でも胸がいっぱいになる。

でも、この五年間、私の娘たちが、この学校での生活を思いっきり楽しみ、何事にも頑張ってくれた。

長い坂道を笑顔で元気に登っていく姿が本当に嬉しかった。

気づくと、明るい気持ちで母校の門をくぐる自分がいた。

こんな気持ちになれたのも娘たちのおかげ。

元気に育ってくれてありがとう。

坂道を登る度に兄の優しい笑顔が浮かび感謝の気持ちが出す。

亡き兄へ、いつも見守ってくれてありがとう。

思いを交える言の葉

— 子から家族へ —



家族の音

私は家が大好きだ。

お皿を洗う音。

お肉をフライパンで焼く音。

麦茶をコップに注ぐ音。

キャベツを切る音。

お風呂から聞こえるはな歌。

足音。

家ではいろんな生活音が聞こえる。

家族の音が聞こえる。

聞くと温かい気持ちになる。

家族が一緒にいてくれる心地よさを感じる。

幸せを感じる。

いつもありがとう。

いっしょにいてくれてありがとう。



お願い、私に頼んでくれませんか

母は一か月に一回程度、大きな一人言を言う。

「ああ、今日もお母さん一人で頑張った」

そしてこつちをチラツと見るのだ。

その一連の流れを見て私は頭を抱えた。

またやってしまった。

洗たく物干しや、茶わん洗いは、家族で分担することになっている。

しかし私や姉は忘れることが多く、気がついたらすべてが終わっている、ということが何度もあった。

それにイラつかれ、冒頭の嫌味を言われるのだ。

困った。家事をやる気はあるのだ。

しかし察しが悪く、母が困っていても全く気がつかない。

母に私の敬語を駆使した心の叫びを聞いてほしい。

「いつも本当にありがとうございます。手伝いたいとは思っているのですが、私大変察しが悪くて。なので、誠に恐縮ですが、自分でやる前に私に声をかけてくれませんか。」

寝ているふり

僕はときどき寝ているふりをする。

そうすれば母が僕の頭を撫でながら、

「大きく育ってね」

と、言っているのが聞こえるからだ。

僕はその時はいつも照れくさくて、寝返りを打つふり

をする。

寝ているふりだから返事はできないけれど、心の中で

はありがとうって思っているんだ。

次の日の朝は、母は変わらず台所で料理を作っていて、

僕がいつもありがとうなんて言っても、きつと母は、

「何のこと？」

と、言うのだろう。だから僕は母の愛情に今日も気付

かないふりをしている。

私の母ちゃん

母ちゃん、いつもありがとう。

私の母ちゃんはサバサバしていて、おもしろくて、た

まにぬけているところもある最高の母ちゃんだ。

私は、一日のうち大好きな時間がある。

それは、男三人がいない時間だ。

弟は寝て、お兄ちゃんとお父ちゃんがいない時、私と

母ちゃんは人生の話をする。

たまに、プロレス大会もする。

恋愛のこと、進路のこと、家族のこと。

この時間は、母ちゃんと私だけの授業みたいだ。

たった一時間ほどの時間でも、私はすごく幸せになれる。

私の機嫌はジェットコースターだ。

そのせいで母ちゃんを困らせることも多々ある。

ごめんね。でももう十五歳だから大人になるね。

母ちゃんと、これからも仲良く色々な話ができるといいな。

本当にいつもありがとう。

もう知ってるかもしれないけど大好きだよ。

十回のごめんと一回のありがとう

私は母と少し考え方が違う。だからすれ違うことだつてたくさんあるし、怒り方も好きではない。

だが必ず最後に「ありがとう」と言ってくる。

怒った後に言う言葉がありがとうだなんて少し変わっている。

だから理由を聞いてみることにしたんだ。

そしたら、「もし一秒後に死んでしまうとしたら『さしてよ』じゃなくて『ありがとう』の方が良いでしょ。

それに、何かを手伝った時にごめんねと言われるより、ありがとうと言われた方がうれしいんだよ。」と教えてくれた。

確かにそうだと納得したと同時に小学生の時の自分の作文を思い出した。

その時の題名が「十回のごめんと一回のありがとう」だった。

やっぱり昔の母の教えが今の自分を作り出しているんだと思った。

お母さん、いつもありがとう。

もっちゃんうらない

いつも不安なことがあったときや、楽しみにしていることがあったときには、

「もっちゃんうらない」をしてもらう。

もっちゃんうらないは、妹の謎のうらないで、例えば、

「今日は、友達から綺麗な花をもらうでしょう。ラッ

キーカラーは紫。」

など、クスツと笑えるかわいいうらないに、私は元気をもらっている。

妹のうらないのおかげで、嫌なことがあっても、毎日少しワクワクできる。

いつも面白い診断結果をありがとう。これからも私をうらなつて、楽しませてね。



お父さんの耳

お父さんの耳は私たちの声なら何でも聞こえます。

私が不安になって一人で部屋で泣いている時お父さんはいつも私の泣き声に気付きます。

そして、

「どうした？」

と言つて、話を聞いてくれて、相談に乗ってくれます。

泣いていない時でも、ときどき

「誰かの泣き声が聞こえた。」

と言つて、部屋に飛び込んできます。

私もお父さんの耳になりたいです。

そしてお父さんの不安な気持ちとかに気付いて、話を

聞いてあげたいです。

お父さん、いつもありがとう。

お父さんの気持ちもたくさん聞かせてね。

大好きだよ。

大好きなばあちゃんへ

本当は、中学二年生だから「祖母」とか書くかと思うんだけどいつもの感じがいいからばあちゃんって書くね。

私は、ばあちゃんが大好きです。

ばあちゃんが運動会で作ってくれた納豆巻きが大好きです。

いつも明るいばあちゃんが好きです。

これからも、ばあちゃんの全部が大好きです。

でも、ばあちゃんは私が小学四年生の時天国に行ってしまうました。

それから、四年も経って中学二年生になったんだよ。

中学生になった私をばあちゃんに見て欲しかったな…。

私はばあちゃんの元気な声少ししわがあった顔

あまりはつきり思い出せなくて悲しいです。

でもねばあちゃん、心の中にある思い出をずっと大切にして頑張るから、見守っててね。

大好き。

似ているところ

お父さんと話すと、私と似たところがあるなと感じます。

例えば、気分がころころ変わるところ。

いつもそれでお母さんに怒られています。私もレストランなどでギリギリまでどれにしようか迷ったり、休日に出かけると行き先を急に変えたいと思うときは、

「あ、お父さんに似ている。」と感じます。

お父さんがよく驚いた時に言う「はははははは」も最初は「めずらしい驚き方だな」と思っていたのですが、今では少しそれがうつってきています。

顔のパーツも少し似ていたりします。

普段、お父さんにはこういった手紙を送りませんが、よく考えてみると似ているところが結構あっておもしろかったです。

母と私を結ぶご飯

中学三年生になり、母と対立することが増えた。

部活のことや進路のこと。自分の意見と母の意見が合わずよく言い争いになっていた。

その後いつも私は部屋に閉じこもり後悔する。

「お母さんは私のことを思っていてくれたのにどうして素直になれないのだろう。」と。

そんな時部屋に聞こえてくる

「ご飯だよ」

という声に救われる。

母が毎日心を込めて作ってくれる温かいご飯。

そのご飯を食べると、ギスギスしていた母との関係も和やかになり、だんだんと会話が弾むようになってくる。

なかなか素直になれない私も、ご飯のおかげで自然と本音が言えるようになる。

母と私を結んでくれるご飯にいつも感謝している。

涙なみだの理由

最近なぜかよく泣いてしまうことがあります。

自分でもよくわからないのですが。

一学期の最初の時、晩御飯ばんごはんを食べていた時急に私が泣いた時、心配して私が話せる状況じょうきょうになるまで待つてくれて嬉うれしかったです。

最後は結局ラインで話しちゃいましたが話せて良かったです。

泣いていた理由は私にもわからなかったのですが途中からは、お母さんが私に優しい言葉をかけてくれたなにか溢あふれてしまったんです。

困惑こんわくさせてしまったかもしれません。

孤独こどくではないんだと改めて思いました。

受験やらなんやらでお母さんだつて大変なのに受験に對する温度差とかで心配かけたり、

苦労かけてごめん。

娘むすめ、頑張がんばります。

母のスマートフォン

私の母のスマートフォンには、八年前からずっと変わらないものがある。

それは、待ち受け画面だ。

画面の中には、私と二つ上の兄が仲良さそうに枝豆を頬張ほおほっている。

母の機種やケースはころころ変わるが、待ち受け画面は私の記憶きおくの中では一度も変わったことがない。

母はたまに自分の友人に待ち受け画面の私たちを見せることがある。

本音を言うと、枝豆ではなくてもうちよつとおしゃれなものを食べている写真がよかったが、嬉うれしそうに見える母の姿を見ていると、私もまあいっかと思つてしまふ。

少し恥はずかしいが、嬉しくもある母の待ち受け画面では、変わらず今日も私たちが笑っている。

思いを重ねる言の葉

— 保護者から子へ —



見ていてくれてありがとう

あなたが幼稚園生の頃、お弁当を作っている私を見ながら「毎日、お母さんって大変だね。」と言いました。ご飯を作ることや家のことを母親がするのは「当たり前」だと思ってもおかしくない年頃のあなたにそう言われて、すごく驚き、嬉しかったのをずっと覚えています。

見ていてくれて、ありがとう。私も、あなたをずっと見守っています。



未来に向かって

じいじがお父さん代わり、ばあばがお母さん代わりで、第二の子育てを必死でがんばっています。

早いもので中学生。

喜びもあり、悲しみもあり、いろんな事があつたね。

時には反抗期もあり、けんかして、ばあばを困らせたり。

でも、ばあばは、いつもあなたのことを考えて、応援

しています。

これからも、いつも明るく元気なあなたでいてね。

そして、これからの成長を楽しみにしています。

ばあばも、あなたが大人になるまで、がんばるからね。

中学生になったあなた

新しい人間関係に悩み、ポツポツと話す。

つい一から十まで、いや一から百まで、

アドバイスしたくなるけど、

よくよく聞くと、自分で解決策を考えている。

見守る時が来ているのだと母も反省。

でも、辛い時はいつでも支えます。

だから、いつでも話をしてくださいね。



二人っきりの十五分間

塾帰りの息子との十五分間の車内。

乗ってきた瞬間に、その日の息子の気分が感じられる

時間。

ある時は無言。

ある時は盛り上がる親子会話。

無音の車内も、爆笑の車内も、親にとっては心地よく、

息子を愛しく思う時間。

どんな日でも、「ありがとう」と呟いて降りる息子の

背中に、「こちらこそ」とメールを送る。

幸せの倍数

双子の君たちは、

お菓子も二倍、月謝も二倍、ユニフォームもラケットも二倍、自転車は二台

(はあ、金かかる)

けんかも二倍、叱られるのも二倍、お風呂も洗濯物も

二倍、虫歯は四本

(はあ、面倒くさい)

笑顔も二倍、笑い声も二倍、嬉しさも楽しみも二倍、

毎日の成長に驚かされること〇〇倍

お金も苦労もかかるけど、君たち二人が繰り出す、計

算できぬほどの幸せの倍数攻撃に今日も完敗です。

参りました。ありがとう。

幸せな時間

娘の長くまつすぐな髪の毛をお風呂上がりにドライヤーで乾かす。

その時間が、私にとって幸せな時間だ。

その間、娘は思いのままに時を過ごす。

テスト前はタブレット学習に勤しみ、空手練習の後は

足のマツサージ、そして疲れている時はウトウトと船

をこぐ……。

たまにケンカをすると、一人で乾かす娘。

少し寂しく思い、私は決まり悪く娘の手からそつとド

ライヤーを奪う。

小さな声で

「ありがとう……。」

という娘。いつのまにか仲直り。

今日もまたいつものように髪の毛を乾かす。

まるで背中からハグをするかのように……。

こんな幸せな時間あとどれくらい過ごせるのだろうか、

と、また少し寂しくなった。

命の授業

観測史上、最も短かった令和四年の梅雨。

その梅雨明けとともにじいちゃんやんが旅立った。

身近な人の死を初めて経験する君。

少し心配しましたが、じいちゃんの最期の命の授業に
向き合っている姿は頼もしく、父は誇らしかったです。



またあとでのおまじない

出勤は朝六時四十分、あなたたちの登校時間に「いつてらっしゃい」が言えないから、

「今日も元気で頑張ろう！またあとで！」

ってみんなで言い合うね。

あなたたちにかけるべき「いつてらっしゃい」は

ママにとっては「またあとで」

あなたたちの「またあとで」がどんなにはげみになるか。

「またあとで絶対お家で会おうね。」

「いつてきます。またあとで！」

二十六円の幸せ

あれは、あなたが三歳か四歳の頃。

毎月、幼稚園の保育料が高く、「お金がない。お金がない。」と口ぐせの様に言っていた私に「お金がないの。僕（ぼく）があげる。」と言ってもらったのが二十六円。

その頃、「幼稚園にがんばって行った分」「お手伝いしてくれた分」と一円ずつあげていたものをようやく貯めたものでした。

しかも、渡す時に「これはバザー委員ががんばった分」「これはご飯（はん）作ってくれた分」と私を真似て小さい手で握（にぎ）らせてくれたのです。

「二十六円じゃ何も買えないよ。」と大笑いした後（なみだ）に涙が止まらなくなったのを覚えています。

お母さん想いの優しいあなた。

十年経ち、多少文句を言う時もありますが、人への思いやりや親切にしてくれる所はちつとも変わっていません。あなたからは沢山（たくさん）幸せをもらったけれど、これが一番忘れられない思い出です。

「へぶ」の顔

育児（きよく）休暇明けの職場復帰（しやうばふき）の頃（ころ）。

あなたは三歳（さい）。

パジャマのまま、朝（あ）ばあばに預けて保育園へ行くという生活が始まりました。

玄関先（げんか）んではあばに抱（だ）っこされて言う「バイバイ」のときのあなたの顔。

泣き顔をへの字口（くのま）でこらえ、「へぶ」の顔。

いつもいつも同じ顔。

「泣かないぞ」と「行かないで」の二つの気持ちがあふれます。

こんな顔をさせてまで、仕事に行かなければいけないのかと、私まで涙をこらえて出勤。

中学生になっても、あの時のたまらなくいじらしい顔を忘（わ）れることはありません。

毎日、家族（かぞ）皆（みな）で頑張（がんば）ってきたこれまでの年月（としづき）を、誇（ほこ）りに思います。

我慢（がまん）強く人に優しい子に育ちました。

人の役に立つ人となれ、と心（こころ）から応援（おうえん）しています。

人生は試練の連続

小さい頃から母子家庭という環境の中、とても我慢強く、人に弱みを見せない息子。

根性がありこれまでも幾つもの試練を乗り越えてきた。

そんな息子が中学生になってから病気という試練にぶつかった。

今まで普通に出来た事が出来なくなり、楽しみにしていた学校の行事等も途中で参加できなくて大粒の涙を流した事、今でも鮮明に覚えてる。

これからも病気の事で、辛い時や我慢しないとイケない時があると思う。

それでも自分が出来る最大限の努力は忘れず、命を大事に現在（いま）を大切に。

息子と共に病気と向き合っていく中で、息子が無事に一日を笑顔で終えられることに日々幸せと、安堵感で胸がいつぱい。

「息子よ、生まれてきてくれてありがとう。」

心のサイン

いつもギャハハと笑うあなたが
ちよっぴりしんみりな顔をして

「おなかがいたい」

と言った時、母は、「きた、きた」と心がまえるんだよ。

「あのね…〇〇」

って心の悩みをゆっくり話してくれるサインだよ。

あなたは気づいてないかもしれない。

これはまだ母だけ知っておこう。



令和4年度「こころの言の葉」コンクール 入賞者一覧

応募総数 14,956点 (中学生 12,979点 保護者 1,977点)

	中学生の部	保護者の部
大賞	北野 凜	伊地知 織絵
準大賞	鶴田 らら	宮前 留美子
準大賞	山下 由貴	永井 結晶
優秀賞	永井 由依	吉村 恵
優秀賞	橋元 瑠華	鮫島 裕二
優秀賞	肥後 愛結	内山 晴子
優秀賞	村上 ひなた	瀬木 菜穂美
優秀賞	前田 奈愛	野口 美恵子
入選	濱島 万翔	宮下 志穂
入選	田中 美月	釜付 恵理子
入選	坂元 咲愛	迫田 さおり
入選	大西 彩音	岩山 香
入選	三輪 帆諏美	肥後 一也
入選	帖佐 菜甫	原口 万里子
入選	有水 心海	宮崎 恵
入選	曾山 結衣	峯元 真琴
入選	宮田 早雪	馬渡 美由紀
入選	向段 文菜	島崎 英子
入選	小村 和香葉	小嶋 健悟
入選	前之園 澄晴	水流 聡子

団体特別賞

鹿児島大学教育学部附属中学校

令和4年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～令和4年11月19日(土) 鹿児島市教育総合センター 3F体育室～



表彰(中学生の部)



表彰(保護者の部)



審査委員長講評



受賞者代表あいさつ



「こころの言の葉」コンクール表彰式 集合写真

審査員講評

審査委員長 原田 義則 先生

「青春は密である」。これは、令和4年の夏の甲子園優勝校監督の言葉です。コロナ禍において学校生活が制限される中、一生懸命に「密な時間」を積み重ねている高校生への「エール」として、多くの人に感動が広がりました。私はこの言葉を聞き、『魔女の宅急便』を書かれた、国際アンデルセン賞作家の角野栄子さんの言葉を思い出しました。「子供は何でできている？」という問いに対して、角野さんは「子供は思い出でできている」と答えられたそうです。

誰もが通過する思春期は、自立していく上で重要な時間です。またやっかいなことに、意思とは反する言動をしてしまう時期でもあります。しかし、人は失敗を重ねて成長していくもの。中学生という時期だからこそ、言葉を尽くして家族と語り合い、「密な時間」や「思い出」を積み重ねて欲しいと思うのです。

令和4年度は、中学生の部に12,979点、保護者の部に1,977点の作品が寄せられました。そこには、日頃は面と向かって言えない「言葉」が綴られていました。中学生の皆さんはもちろん、多くの人にこの作品集を手にしていただき、語り合うことの大切さを共有していただけたら幸いです。

本コンクールは、今回で記念すべき20回目を迎えました。関係各位の皆様にご心からお礼を申し上げますとともに、今後のさらなる発展を祈念します。

鹿児島大学教育学部 国語教育講座准教授

審査員講評

遠藤 陽子 先生

「こころの言の葉」の審査にあたり、集まった家族の日常に心が和み、目を細める瞬間が何度もありました。と同時に、各家庭の幸せの基準は周りが決めるものではないことも痛感しました。一見、不遇な環境に置かれた家族も、自分たちなりの幸せを大切にしながら日々を過ごしています。それは周りの人には分からないものです。手紙を通してそういった家庭の幸せの在り方、基準を考えさせられました。

また今年度の作品の特徴として、「ありがとう」の感謝の言葉に代わって「大好きだよ」と書かれた作品が多く、家族間の距離の近さを感じると共に、同じ目線に立った家族の会話が聞こえてくるようでした。しかしながら、思春期の子を持つ大人たちは、子どものそっけない態度に苛立ち悩むことも多いでしょう。子どもたち自身も揺れ動く感情を上手くコントロールできず、歯がゆい気持ちを手紙に綴っていました。子どもたちは私たちが思う以上に大人の行動を見ています。私たちの一挙手一投足が子どもの未来を左右するという、また何より温度のある言葉をお互いに紡ぐことが健全な家庭教育において大切だということを実感しています。

この作品集をご覧になって、少なからずご自身の家族のことを思い出したと思います。普段忘れがちな素直な言葉を相手に届けてみてはいかがでしょうか。この作品集が家族の絆をより一層育む一助になれば幸いです。

フリーアナウンサー

隈元 浩二郎 先生

例年、「親子の絆」が主題の中心となり、言の葉が綴られていきますが、今年度はその絆の範囲や相互のかかわり方が、幅広く拡大されました。例えば、親代わりの祖父母とのかかわりをはじめ、兄弟や親戚間でのやりとり、単身赴任の父親への思い、今は亡き家族へ向けた感謝の言葉などが、多彩に描かれていました。

また、新型コロナ・ウイルスにゆさぶられて3年目となりましたが、在宅時間等が長くなり、家族間でも様々な摩擦が生じ、その様子をストレートに描いた作品も増えました。ただ、互いに不満をぶつけ合っただけでは、根底ではぶれることのない相手を感じる気持ちが根付いているのでしょうか、少しも違和感なく、生き生きとした親子関係が見え隠れし、思わず微笑まずにはいられない作品ばかりでした。

こうやって衝突した互いの思いが「こころの言の葉」に掲載され、そのことが十年後、いやもっとその先で読み返され、新しい「こころの言の葉」のドラマが展開されていくのかと想像すると、心がわくわくと弾み、夢が大きく広がります。こうやって家族で「こころの言の葉」にかかわったということが、新しい家族の歴史に刻まれていく。時空を越える言葉の力に、改めて感動を覚えます。

コロナ禍の影響はこれからもまだまだ続きますが、今年度の作品は「家族の絆」の無限の可能性を再認識させてくれる作品ばかりです。どうぞこのような時代だからこそ、機会あるごとにこの作品集を家族が一緒になって読まれ、共有した感想を将来に繋いでいただければ幸いです。

元中学校校長

西 ゆう子 先生

コロナ禍、感染防止を気遣い、「自粛」しつつの生活も3年がたとうとしています。そんな中、今年も作品を読ませて貰って、手紙が各家庭のコミュニケーションのきっかけになったのではと、温かく爽やかな元気が湧いてきました。

保護者の作品からは、家族の人数、形態や状況も様々な中、子供の幸せや成長を喜び祈る気持ちがぐっと伝わってきました。例をあげますと、「祖父母孝行は親孝行」、「一家の大黒柱と言った息子へ、これからは母が支えるから」、「いってらっしゃいが言えないからまたあとでと言合おう」等の言の葉です。

子供たちは、保護者宛てに手紙を書く過程で、改めて自分を振り返ったり深い愛に気付いたりしていました。日頃は面と向かっては言えない思いを「言の葉」で伝えられ、よかったねと心から言いたいです。例をあげますと、「少し恥ずかしいけど、本音を言うと甘えたい」、「これからもたくさんほめてね」、「ヒーローみたいな母」等の言の葉です。

中には辛い体験を乗り越えたり、会える日が限られたりしているからこそ、日常の普通の生活や会話を感謝していると綴られた言の葉もありました。中学生のこの時期にもらったり書いたりした手紙はかけがえのないお互いの「宝物」になったことでしょう。

20号となった「こころの言の葉」をたくさんの皆様が読んでくださることを心から願っています。

元スクールカウンセラー

中島 正義 先生

思春期の子育てでは、親と子がお互いに何を考えて、どう思っているかがわからないという家庭も多いと思います。でも今回の作品を審査させていただいて感じたことは、みんな面と向かって言葉にしていなくても、心の中ではお互いに労り合い、心配し合い、そして応援し合っているということです。人間関係が希薄になってきたといわれる時代であっても、親子の愛情は変わらないのだと、温かい気持ちになりました。

子育てにおいては、親も子どもも悩むことが多いものですが、この作品を読んで、自分の気持ちはきっと伝わっていると信じて、毎日を過ごしていただきたいと思います。

そして可能であるならば、その想いを、ぜひ相手に直接伝えていただいて、笑顔がいつぱいの家庭が増えていって欲しいと願っています。素晴らしい作品を応募して下さった皆さん、本当にありがとうございました。

市PTA連合会副会長

第二十集記念

回想の言の葉

—— 子から親へ ——



「言の葉」二十周年を記念し、過去の作品から十点を選んで紹介し、これまでの歩みを振り返ります。

父の卵焼き

今日はお母さんが実家にお泊りしていて家にいなかった。

だから部活の弁当はお父さんが作ってくれた。

昼食のとき、弁当箱を開けてみた。中身は冷凍食

品と卵焼きだけで。

でも卵焼きだけお父さんの手で作ったから、茶色く

こげていた。食べてみると、

パサパサしていて正直おいしくなかった。でもなぜ

だろう。

急に胸が熱くなった。おいしくない卵焼きをおいし

いと思えた。

冷凍食品もまるでお父さんの手で作ったかのように

愛情がこもっていた。

日曜日の朝、仕事でつかれているのに私のために

早起きをして弁当を作ってくれた。

でも、私は素直じゃないから「ありがとう。」って

言えなかった。言いたいけど言えない。

だけど、今度絶対言おうと思う。「ありがとう。」って。

母の思い

この間、押し入れを片付けていたら母の一冊のノートにたくさんの手紙が挟まっていた。

開いてみると、私が今までに母へ贈ったものだった。母の誕生日に書いたバースデイカード、母の日に書いた感謝状、サンタさんに宛てた手紙など、全て忘れられないものばかりだ。

小さい頃、母から、

「今までもらった手紙は、お母さんの宝物だから、秘密のところにしてしまつてあるんだよ。」

と、言われたことがある。

こんなにも、大事にしてくれていたのかと思うと、涙が止まらなかつた。もつと、たくさん書いてあげればよかつたと後悔した。

直接伝えられないけれど、天国の母へ感謝の気持ちを伝えたい。

「大好きだよ、お母さん。本当にありがとう。」

ありがとう、父さん

父さんいつもありがとうね。いつも父さんには嫌なことばかり言ったり、嫌な行動ばかりしてごめんね。父さんは私のために、朝から晩まで毎日必死に働いているもんね。

でも父さんには、ちょっとした障がいがあるから、トラックとかの免許を取りたくても、ほんの一部しか免許を取ることができないし、「ここで働きたい」と思っても簡単には働けない。働く期間が限られ、何ヶ月かしたら別の仕事を見つけないといけないときもある。こんなことが続くけど父さんは一言も弱音を吐かない。

あのね父さん、わたしが我慢すればいいんだつたらどんな事でも我慢するよ。寂しくても我慢するから、絶対に「ごめんね」なんて言わないで。その言葉を聞いたら、心が折れそうになるから、涙が止まらなくなるから、お願いだから言わないで。

普段恥ずかしくて言えないけど、いつも心の中で感謝しているよ。本当にありがとう。これから、もつともつと手がかかるけどよろしくね。大人になったら、私の奢りで何か美味しいもの食べに行こうね。それまで待つてね。

言葉をもらう日

私にとってあなたは いつも怒^{おこ}っている印象しかありません。

いつも私にだけきびしくありませんか。

私は成績が悪いです。だからもちろん勉強が大嫌^{きら}い
です。

でも今、一番熱中して取り組めるものがあります。

それはバスケです。私はバスケが大好きです。

だから、弟みたいに成績がよくありません。

でもそんな私でも、

あなたに、「がんばったね」という言葉をもらうた
めだけに

毎日必死です。

だから弟だけをほめないで下さい。

私は、あなたから、言葉をもらう日をまっています。

ずっと、ずっと

心の花

ぼくの両親は、いつもぼくの持っている心の花に水
をやってくれる。花が枯^かれているときも、折れてい
るときも、水をやってすぐ元気になる。

でも、ときどきやりすぎることがある。ぼくが元
気に満開の花を咲かし、まだ水はいらないってとき
にも水をやろうとする。すると、なんか少しずつ息
苦しくなってくる。息苦しくなって、最後には枯れ
てしまう。花は、水をやりすぎても、枯れてしま
うのだ。

だからお願いです。水はちゃんと、花をみてから
やってください。ぼくが枯れてしまわないために。



回想の言の葉

— 親から子へ —



大人の宿題

大人になるとテストや宿題がなくなり、楽だと思っていました。

ところが、子供が生まれ、子育てが始まると、いろいろな問題におつかります。

まずは、言葉が話せず、子供の様子から思いを感じ取らなければならず、これも、なかなか難関でした。

また、少し大きくなったら、あいさつや後片付けなどの「しつけ」をしなければなりません。これが、簡単にはできず、いろいろな工夫が必要でした。さらに成長し、自分で考え、判断・行動できるようになったと思っていると、心の成長に必要な反抗期や友達とのトラブルなど、難問です。

親には、先生や教科書はありませんが、子供のことで日々、課題が与えられます。自分の親や先輩の話、本を参考として、問題にトライします。

正解なのか不安になりますが、子供たちの笑顔を見ると、良かったのかなあと、また次の問題へと。

頑固親父の本音

もっと勉強しろ。体を鍛えろ。だらだらするな。
はしつとしろ。あいさつをしつかりやれ。めしをさき
ちんと食え。

人をいじめるな。人に迷惑をかけるな。男は泣くな。
もつともつと頑張れ。自分に負けるな。根性をつけ
ろ。

途中で投げ出すな。ぐずぐずするな。やることはさ
ちんとやれ。

わがまま言うな。もつと一生懸命やれ…。

と、思ったけど、

まあ今のままでいいよ。おまえは俺の子なんだから。



中学生の君

いつからだろうか。君との会話が成り立たなくなっ
たのは。

君が怒って登校した日は、

「無事に学校に行ったかしら。」

「友達とはケンカしてないかしら。」と気を揉みます。

君が話してくれるのがうれしくて、問い返すと

「うざい。」「うるさい。」「気持ち悪い。」「もう、慣れ

たとはいえ、落ち込みます。

だけど、塾の迎えの車中、

「すみませんでした。」「このひと言で、何もかも、ぶっ

飛びます。

こんな毎日が、懐かしく思える日を信じて。

あなたに甘あまえていました

何年前だったかな。次女が「お母さんみたいな看護師になりたい」って言った時、三女のあなたは「看護師にはなりたくない。自分の子供がかわいそう」と言いました。

お母さんは、子供を三人産み育てながら、この仕事を続けました。病院には患者かんじやさんがいるので、昼も夜も、日曜も祝祭日ありません。限られた時間の中でたくさんのお事をこなすには、何か犠牲ぎせいにならなければならない。それを思い知らされたのが「子供がかわいそう」というあなたの言葉でした。

くたくたにならなくなって帰り着くと、台の上に「おかえり」の手紙。最後には必ず「ママ大好き」って書いてくれていました。その言葉に甘えていました。どんな気持ちで書いていたのか知りませんが、自分だけが優しさをもらって返事も書かなかったね。ごめんね。そして本当にありがとうね。あなたは大切な大切な娘むすめです。心から誇ほこりに思っています。

息子よ

中学三年の夏休み。受験生と呼ばれるようになっておまえは、その呼び名にとまどってるようだ。

それは高い山を見上げて、自らを奮い立たせている登山者のようでもあり、巣立ちを前に、高い木の上からおそるおそる下をのぞき込むひな鳥のようでもある。

息子よ。一歩踏ふみ出してみろ。

そして思い出せ。息を切らして登った山の頂から見えた景色を。登る前には想像もつかなかった世界が広がっていただろうか？

息子よ。思い切つて羽ばたいてみる。おまえはまだ未熟だけど、ちゃんと空を飛べる羽を持っている。広い空を飛べば自分の進むべき道も見えてくるさ。

息子よ。迷わず、自分を信じて進め。

お父さんはおまえを信じている。おまえならやれる。

編集後記

関係の皆様のお力により、「こころの言の葉」コンクール作品集を2年ぶりに製本化することができました。記念すべき第20集を皆様の元へお届けできることを大変喜ばしく思います。

さて、「中学生とその親の心の交流」を所期の目的として始まった「こころの言の葉」コンクールですが、本年度の応募総数は約15,000点、そのうち保護者の部は2,000点近くの応募があり、本事業の趣旨が20年という時をかけて、着実に浸透していることが感じられました。各中学校でのこれまでの取組に感謝申し上げます。

第20集では、今年度の入賞作品に加えて、過去の作品から数点を選んで掲載し、「こころの言の葉」のこれまでの歩みを回想できるようにいたしました。現代は変化が激しい時代と言われますが、家族のお互いへの思いが形になった「言の葉」は、いつの時代でも読む者に感動を与える不変のものであると気付かされます。

これからも、様々な場面で、ますます家族の心の交流が図られることを願っています。

鹿児島市教育委員会

こころの言の葉

～ 第20集 大切なあなたへの思い いつまでも～

令和5年1月

編集・発行 鹿児島市教育委員会

〒892-0816 鹿児島市山下町6-1

TEL (099) 227-1941 FAX (099) 227-3016

南日本リビング新聞社

〒892-8515 鹿児島市泉町14-1リビングビル

TEL (099) 222-7288 FAX (099) 225-5009